

特集「歴史と伝統技術の可能性」を企画して

特集担当編集委員 真杉 隆志、大山 潤

企業とりわけ製造業においては、創業時から代々受け継がれている伝統的な技術が存在し、時代の変化にともなうニーズに応えるため幾度となく手を加え高度化させることで、コア技術となり今日に至っている。技術そのものが企業成長の原動力となっているのではないだろうか。技術の変化を促進させるためには経営の判断も非常に重要である。日本のものづくりの歴史、技術の育て方などを「歴史と伝統技術の可能性」という特集にし紹介させていただく。

神戸学院大学の井上善博氏には、「共感と信頼のビジネスモデル — 持続可能な経営を目指して —」と題してご自身の研究テーマである長寿中小企業の経営学、戦略の考え方をまとめていただいた。長寿企業の日本における実態、長寿経営は近江商人のビジネスモデル、石門心学の道德心について、経営学においてはビジネスを行う際の重要ポイントとして、共感、信頼、を経営ビジョンに据えることが重要と解説いただいた。

株テクノ・インテグレーションの出川通氏には「ローテクとハイテク技術の融合によるイノベーションの実現 — 実践 MOT による中小企業の下請け化を避ける新商品開発 —」と題して、企業向けに開発・事業化のコンサルティングや研修、実践マネジメントなどを行っている立場から、技術のマネジメント力強化のためのローテク、ハイテクを融合した技術経営手法を案内いただいた。

セイコーエプソン株の蟹澤啓明氏には「70周年を迎えた国産機械式時計の歴史とエプソンの技術が融合し新ムーブメントが誕生」と題して、自社ブランドであるオリエントスターの開発話をご紹介いただいた。電池（クォーツ）式の腕時計が多くなる中、一貫して機械式時計にこだわりを持たれている。駆動装置であるムーブメントは、その時々で最新の技術を取り入れ素材の選定方法などの他加工技術にも力を入れていることが伝わる。

ホソカワミクロン株の井上義之氏には「100年企業としての経営戦略」と題して、自社の100年の歴史を経営戦略の担当の立場から寄稿いただいた。会社を経営していく過程には、何度となく舵取りを慎重にやらねばならない転機が訪れるとある。環境、優れた経営者の先見の眼、技術力が必要であることと、一貫した思想が発展・成長には必要と言われたところに感銘を受けた。

株ムラカミの村上賢治氏には「ハイテクとは、ローテクとは」と題して、寄稿いただいた。伝統的な染色技術に携わり今では、独自のプラスチック染色技術を有している企業である。今回は、特集号のため経営者の立場で自らの考えを、さまざまな角度から考察しまとめていただいた。

各企業独自の伝統的なコア技術は競合他社との差別化、競争優位性の観点から経営戦略、事業展開に用いられている。さらに多様な商品開発、新規市場への進出など有効な手段である。本特集ではほんの一部の内容であるが、今後の展開につながるヒントになれば幸いである。